

感動詞の「別語」認定をめぐる問題について

石川 創

【キーワード】 感動詞 語末長音 語末促音 内破音 音声 表記

1. はじめに

感動詞は、単独で文を構成しうる、文中の他の成分から独立している、話し手の心の動きが分化されないまま表出されるなどの特徴により、近代以降、日本語の中で一つの品詞として扱われてきた。

しかし、「あ」に対する「ああ」や「あつ」などのように、「語末に長音や促音を付加した語形が別語と見なされる」¹のは、感動詞にしかない特徴であり、また先行研究においてこの点が注目されることはなかった。現代の国語辞書や感動詞に関する先行研究において、例えば、「軽い感動」を表す際には「あ」、「強い感動」を表す際には「ああ」、「驚き」を表す際には「あつ」のような「別語」が選択され、発話されると説明されている。

しかし、例えば、「我々はあ、……と考えるのですっ。」と表記された文があったとしても、「は」「です」という助詞・助動詞に対し、「はあ」「ですっ」が別語と認定されることはなく、感動詞と他品詞の「別語」認定は整合しない。

筆者は、石川創（印刷中）において、現代の小型国語辞書 28 種における感動詞の収録状況や中世以降の古辞書や文学作品等の記述から、感動詞の認識に関する音声上の問題（特に音調と語末促音の問題）について明らかにすることを試みたが、本稿では、語末長音・語末促音の問題を軸に、それらの音声に関する聞き取り調査も行った上で、感動詞において「別語」を認定する基準について考察する。

2. 先行研究における感動詞の「別語」認定とその問題点

2.1. 短呼形と長呼形の区別——語末長音の問題について

「あ」のような短呼形と、「ああ」のような長呼形は、文学作品の表記や辞書等に古くから併存しており、それぞれが別語と見なされてきた。表記の上では確かに区別される両者であるが、これは短呼形と長呼形が異なる語であるということを示すものではないと考える。それでは先行研究において、感動詞の短呼形と長呼形はどのように扱われてきたのであろうか。

明治初期の国語教科書の古川正雄（1873:十二丁表）では、「なげきことば」（歎

¹ 「あ（あ）」に対する「あ（あ）ん」など、語末に撥音を付加した語形についても同様のことが言えるが、本稿では長音・促音の問題に限定して論ずることとする。

息詞)について、「すべて かなしき うれしき などに つきて、(中略)おぼえず くち に いづる ことば なり」と解説している。また国語辞書『言海』所収の大槻文彦(1889:66)では「感動詞」の術語を用いて、「喜怒哀楽等、凡ソ、人情、感動スル所アリテ發スル聲ナリ。」と定義している。

古川が「おぼえずくちにいづることば」、大槻が「人情、感動スル所アリテ發スル聲」と記したように、感動詞は明治期の時点で「実際の発話の場面で声に出して発せられる」ことが前提とされていたと見てよいが、当時から感動詞の短呼形と長呼形は別語として扱われていた。

大槻(1889:66)は、感動詞のうち「言語ノ上ニ立ツモノ」(現代の感動詞に相当)として「あ、ああ、あら、あな、あはれ、いで、いざ、やよ」を挙げている。しかし、「あ」と「ああ」を一つの見出しにまとめた上に、用例としては「ああかしこしや」しかあげていない。また、『言海』における「あ」の語釈も「ああニ同ジ。」であり、両者を別語としながらも、意味の区別をしていない。

現代の国語辞書は、短呼形と長呼形を別見出しとする場合、大槻(1889)と同様に両者を「別語かつ同義」とする場合もあるが、短呼形は長呼形より「軽い」、あるいは長呼形は短呼形より「強い」言い方であると説明するものも複数ある(注2も参照)。すなわち、感動詞は語末に長音を付加(あるいは語末の長音を削除)することにより、感動の「軽さ・強さ」が違う別語になるという解釈である。

しかし、こうした解釈は以下の二点において問題がある。

ア. 異なる発音が可能であることと、それらが異なる語であることは別の問題である。

イ. 発音の長短と感動の強弱との間に、直接的な関係はない。

まず、アの問題について、1.でも「我々は^ア」のように、感動詞以外の品詞は種々の発音がなされても、それらが別語とは見なされないということを述べた。また、どこまで伸ばせば「ああ、おお、さあ」のような長呼形で、どこまで縮めれば「あ、お、さ」のような短呼形かということを、発音の時間の長さから規定することは不可能であり、短呼形と長呼形の境界を明確に定めることはできない。語の末尾を伸ばして発音することは、別語を作る手段ではないのである。

またイの問題について、例えば「さ」と「さあ」を区別する国語辞書の多くが、「さ」のことを「さあ」よりも「軽い」言い方であるとしているが²、縮めたから

² 松井栄一編(2005)『小学館日本語新辞典』(小学館)、小学館辞典編集部編(2006)『現代国語例解辞典』第4版(小学館)、見坊豪紀ほか編(2014)『三省堂国語辞典』第7版(三省堂)、小野正弘ほか編(2015)『三省堂現代新国語辞典』第5版(三省堂)が、「さ」を「『さあ』の軽い(かるい)言い方。」としており、金田一春彦ほか編(2012)『学研現代新国語辞典』改訂第5版(学研教育出版)は「(1)→さあ①。『一、始めよう』(2)物事の状態がせつばつまった時に発する語。『一、どうしよう』(※白抜き文字は括弧書きにした。以下同じ)とする。

といって、「軽く」なるとは限らない。「さ（あ）、行きましょう。」と言うような場合、出発することをためらっている相手に対して強く話しかける場合には、強く短く発音する（「さ」）こともある。強い気持ち、軽い気持ちの表出には、発音の長短のほかにも発音の強弱や高低など、種々の要因が関係している。

以上のことから、感動詞の語末を伸ばすこと、あるいは縮めることは別語を作ることとは関係がないということ、すなわち短呼形と長呼形は「意味の異なる別語」の問題でなく、「同一の語の発音の違い」の問題であるといえる。

なお、感動詞の中には短呼形・長呼形の混乱が生じないものもある。それは、森山卓郎（1996）が「内発系」（内的な情意がいわば「湧いて出る」タイプ）の「情動的感動詞」と呼ぶものであり、これに分類される語は、「*あ、疲れた。」（＜「ああ」）、「*うん、痛い。」（＜「ううん」）では非文となるように、必ず伸ばしが必要となる。すなわち、「内発系」の語には、長呼形しか存在しない。森山は、「{あ／ああ}、思い出した。」や、「{わ／わあ}、びっくりした。」のような場合に用いられる感動詞を、「遭遇系」（何かの状況に遭遇してそれが直接的なきっかけとなって急激な情意的変動がおこるもの）の「情動的感動詞」と呼ぶが、これに分類される語は、短呼形・長呼形がいずれも自然である。「ああ、疲れた。」の「ああ」と、「{あ／ああ}、思い出した。」の「あ／ああ」は分けて考えられるべきものであり、本節で論じた短呼形と長呼形のゆれの問題が生じるのは、短呼形・長呼形がいずれも存在する「遭遇系」の情動的感動詞に限られる。

2.2. 語末の「っ」の識別——語末促音の問題について

本節では感動詞の語末促音の問題を論ずる。本稿では、感動詞の語末に促音を表す「っ、ッ、っ、ッ」が付された語形を「語末促音語形」と呼ぶこととする。

現代の小説や漫画、戯曲等の会話文では、「（熱湯に触れた瞬間に）あ、熱い。」とするより、「あっ、熱っ。」のように書く方が自然であり、表記上は「あ／ああ」と「あっ」に明確な使い分けがある。

近代の研究書において、語末促音語形の感動詞が採り上げられることは少なく、橋本進吉（1929:124）に「あゝ」と「あっ」を別に示す例などが見られる程度である。また、近代には多くの国語辞書が編纂されたが、語末促音語形を見出しに挙げるものは少ない。表1に示したのは、語末促音語形を収録する近代国語辞書の例である。

（表1：語末促音語形を収録する近代国語辞書の例）

出版年	書名	編著者、出版社、および収録語に関する補足
1871-84	『官版語彙』	木村正辭・横山由清編、編輯寮。「衣之部」まで13巻で未完。巻二（1871）に「あっ」（凡例に「促呼音には小黒圈を附す」

		とある)の見出しあり。「人に應答する詞」の語釈を施す。
1912	『大辞典』	山田美妙編, 嵩山堂。上下巻。複数の語末促音語形を収録。「あッ」に「あ(感)ノーシホ迫ツテ發スル音。」「えッ」に「え(感)ヲソヨメテ云フ語。」の語釈を施す。
1915- 19	『大日本国 語辞典』	上田萬年・松井簡治共著, 金港堂書籍。全4巻。複数の語末促音語形を収録。「あっ」に「(一) 感嘆・危急・又は驚く時などに發する聲。ああ。(二) 人に應ふる声。はっ。あ。」(用例や下位項目を省略, 以下同じ)、「わっ」に「意外なる出来事などにあひて驚きたる時に發する声。」の語釈を施す。
1934- 36	『大辞典』	平凡社編, 平凡社。全26巻。複数の語末促音語形を収録。「アッ」に「噫との促音便。(一) 感じて發する聲。驚異または喜怒哀樂の際などに思はず發する聲。(二) 應答の聲。」「エッ」に「(一) えいに同じ。(二) 意外のことにおどろいて發する聲。」の語釈を施す。

※引用に際し、変体仮名を現行の仮名字体に改めている。

表1のうち、『大日本国語辞典』と『大辞典』(平凡社)は大型国語辞書である。また、未完である『官版語彙』は別として、『大辞典』(嵩山堂)も5,000ページを超えるものであり、語末促音語形を収録するのは、規模の大きな辞書に限られていたと考えられる。金田一京助編(1943)『明解国語辞典』(三省堂)には、小型国語辞書でありながら、「ちえっ、はっ、わっ」などの見出しが設けられたが、その後も『明解国語辞典』の改訂版(1952)を除くと、金田一京助ほか編(1972)『新明解国語辞典』(三省堂)に至るまで、小型国語辞書には語末促音語形の感動詞は採録されなかった。1980年代後半以降は、収録語数の少ない小学生向けの辞書を除けば、ほぼ全ての小型国語辞書が「あっ」等の語末促音語形を掲載するようになり、現在では語末促音語形が独立した語として認識されているといえる。

それでは語末促音語形は、語末促音を有しない語形と何が異なるのであろうか。

表1に示した『大日本国語辞典』の「あっ」・「わっ」、『大辞典』(平凡社)の「アッ」・「エッ」の語釈の通り、近代国語辞書において感動詞の語末促音語形は「驚き」と関連づけられることが多い。このような解釈は現在も受け継がれており、例えば田窪行則・金水敏(1997)が応答詞・感動詞類の用法を分析するために採り上げた語のうち、語末促音語形は「えっ、はっ、ふんっ、おっ、わっ、あっ、はっ」の7語があるが、田窪・金水は前者5語を「意外・驚き」、後者2語を「発見・思ひ出し」に分類している。また、富樫純一(2013)は、心内処理の観点から「驚き」を表す感動詞である「あっ」「わっ」「げっ」について具体的に分析しており、「あっ」は情報の獲得のみでその後の評価を伴わず、「わっ」は情報獲

得後の“意外性”という評価も行い、「げっ」は情報の獲得のみに近いが意外性があるという判断はできているという差異があることなどを明らかにしている。

このように、多くの研究者によって、感動詞の詳細な意味分析が進められているが、筆者は「語末促音語形」を「驚き」と結びつけることには問題があると考ええる。感動詞は、単独で文を構成することができるが、現代日本語では文末（および文節末）の促音を認識することができないからである。

先行研究では、語末促音は声門閉鎖によって具現されると定義されることが多い。例えば金田純平（定延利之編 2012:61）は、小書きの「っ」について、「この文字が語末に記されると、それは『あー』『げー』のように直口の母音を長く伸ばすのとは対照的に、直口の母音を短く、鋭く切って発音することを意味します。そのためには、喉のあたりに力を入れて、肺から上がってきた空気の通り道をしっかり閉鎖する必要があります（このような発声を声門閉鎖と呼びます）」³と定義している。また、福盛貴弘（2010:217）も、促音についての解説の中で、「さて語末ですが、例えば『あっ』という時には[aʔ]のように無声声門破裂音となることがあります。」と述べている。しかし、語末促音を「驚き」と結びつけること、声門閉鎖によって具現されると考えることには、以下の二点で問題がある。

ウ。「驚き」等の表出の際、語末（文末・文節末）に声門閉鎖（無声声門破裂音[ʔ]）が現れるという合理的な理由がない。

エ．現代日本語（共通語）において、発話末の[ʔ]の有無は話し手・聞き手の両者にとって意識されない単音である。

この二つは、根本的には同じ問題である。「驚き」が表出する全ての場合の語末（文末・文節末）に[ʔ]が現れるのであれば、それは驚きを表出するための単音・音素と考えてよいが、実際にはそうでない場合も多くある。「あっと驚く」というように、後接成分があれば促音を認識することが可能であるが、その場合、促音部分の発音は[ʔ]でなく、後接する成分の子音である。

また、肺からの空気の流れを止める発音（内破音）には、声門破裂音の[ʔ]だけでなく、両唇破裂音の[p]、歯茎破裂音の[t]、軟口蓋破裂音の[k]などもあるが、[ʔ]のみが「驚き」を表すというのも不自然である。仮に語末の[p]、[t]、[k]を「驚き」を表す単音と認定したとしても、それを聞き分けることができないのは、現代の漢字音において入声韻尾が消滅していることから明らかであろう。

以上のことから、「語末促音」を文末・文節末において聞き分けることはできず、「語末促音語形」は驚きを表すための要素にならないといえる。すなわち、「あ／ああ」とは別に、「驚き」等を表すための「あっ」という感動詞が存在するわけではないということである。

以上、本節では感動詞の語末長音・語末促音語形について、それぞれが別語の

³ 「直口」は原文ママ。大学の授業における使用を想定し、空欄が設けられている。

感動詞として存在しているわけではないということを主張した。次節では、筆者の主張を裏付けるための根拠を示すこととする。

3. 感動詞の語末長音・語末促音の認識に関する調査

3.1. 調査の概要

2.1.と2.2.では、「あ」と「ああ」、「あっ」のような短呼形と長呼形、ならびに語末促音語形がそれぞれ独立した「別語」ではないということを主張した。仮にこれらの語形が別語であるとしたならば、聞き手は発話の音声や、「軽い感動」、「強い感動」、「驚き」といった意味を元に、それぞれを聞き分けることができるはずである。この点を明らかにするために、音声の認識に関する調査を行った。

調査は、2014年7月18日に、東京都内の私立女子大学で、筆者が担当する講義の受講者のうち、日本語母語話者の学生（全87名）を対象に行ったものである。以下のように課題を指示したアンケート用紙を配布し、筆者自身の声の録音を、教場に設置されたスピーカーから、各問につき2回ずつ流した。

これから流す五つの音を聞き、特にのばす音やつまる音に注意して、聞こえたとおりに文字に起こしてください。

感嘆符「！」や疑問符「？」、長音符の「ー」や小書きの「あ、い、つ、ッ、……」など、種々の文字や記号、かななどを自由に使ってかまいません。

表記を自由にするよう指示したのは、回答者が規範的な表記を意識し、長音・促音に関する表記をためらうことのないようにするためである。

3.2. 各問の音声と調査結果

続いて、(1)～(5)の各問に用いた音声について簡潔に説明する。表記について、例えば(1)を「え（っ、ー）そうなの（っ、ー）」としたのは、回答者が前半部を「え」、「えっ」、「えー」、後半部を「そうなの」、「そうなのっ」、「そうなのー」のように表記したことを示す。(1)～(5)の音声は、説明の中に記したように、特定の場面を想定しながら発声した。これは、「軽い／強い感動」・「驚き」等が感じられる音声を聞いた時、文字起こしに変化が生ずるかを確認するためである。

(1) 「え（っ、ー）そうなの（っ、ー）」

「予想とは異なる情報を提供され、疑問を呈す場面」を想定。前半部の末尾は、上昇させた後に、「そうなの」の「そ」へと続く促音を意識し、[s]の歯茎摩擦音を強めに発音した。後半部は末尾を上昇させた上で、伸ばしたり止めたりすることを意識せずに発音した。

(2) 「あ（っ、ー、ーっ）あぶない（っ）」

「相手に危険が迫っていることを警告する場面」を想定。前半部は伸ばした後に末尾で声門閉鎖を意識した。後半部は早口に発音し、末尾は伸ばしたり止めたりすることを意識しなかった。全体的に声を大きく発音した。

(3) 「いえ (っ) わかりません (っ)」

「事情を知らない状態で、他者から説明を求められ (例:『どうして書類がなくなっているのか』)、返答する場面」を想定。前半部・後半部とも、末尾を伸ばしたり止めたりすることを意識せずに発音した。

(4) 「へ (一, 一っ) なるほど (っ, 一)」

「未知の情報を提供され、得心する場面」を想定。前半部の末尾は上昇させながら伸ばすことを意識して発音した。後半部の末尾は伸ばしたり止めたりすることを意識せずに発音した。

(5) 「あ (一, 一っ) つかれた (っ, 一, 一っ)」

「疲労感がある状態で、伸びをしながらひとりごとを言う場面」を想定。前半部は声を大きくし、末尾は伸ばした後に「つかれた」の「っ」へと続く促音を意識して発音した。後半部の末尾は[t]の音を意識して発音した。

問(1)~(5)の音声に関する回答結果を表にまとめ、各音声の波形・スペクトログラム・ピッチ曲線を示したものが、本稿の末尾に示した表2~6と図1~5である。音声分析はWaveSurfer (KTH, <http://www.speech.kth.se/wavesurfer/>) によった。なお、長音を表す符号・かなが用いられた表記はすべて長音符「一」にまとめて集計し、ひらがな・カタカナ表記の別や、濁点の付加、句読点・疑問符・感嘆符などの記号は、伸ばし・詰まりの聞き分けと直接には関係しないため、今回の集計においては考慮しなかった⁴。表2~6の「その他」は、基本的に当該の箇所が記入されていなかったものであるが、筆者の意図と大きく意味が異なっている表記⁵についてもこの項目に入れた。そのほか、特に注記が必要な回答については各表の下に示した。次節では、この結果を元にした考察を行う。

3.3. 「別語」認定と音声・表記の関係について

(1)~(5)の回答結果から分かることは、大きく分けてオ・カの二点である。

オ. 語末 (文末・文節末) の促音 (「っ」) 表記に関する認識のゆれ

カ. 語末 (文末・文節末) の長音表記に関する認識の一致

まずオについては、各問に小書きの「っ」がある形とない形とで回答が分かれていることから、語末 (文末・文節末) における促音については、共通した認識がないことが分かる。3.2.で述べたように、(1)・(5)の前半部の末尾では一般的な (語中の) 促音を、(2)の前半部の末尾や(5)の後半部の末尾では[ʔ]や[t]を意識した発音であるが、(1)の「え」と「えっ」、(2)の「あー」と「あーっ」の回答の比率はほぼ1対1となっている。(5)は、「あー」と「あーっ」が約7対3、「つかれ

⁴ 例えば、「ええ」、「ええ!」、「えゝ〜!」などの表記はすべて「えー」に、「えッ」、「エゝッ」、「えっっ?」などの表記はすべて「えっ」にまとめて集計した。

⁵ 例えば、問(3)の前半部を「いえっす」と表記した回答者がおり、これは「その他」として集計した。

た」と「つかれたっ」が約2対1となっており、「っ」の表記のない回答の方が多い。さらに、(3)・(4)のように前半部・後半部ともに末尾に内破音を意識しなかったものも、(4)の前半部を除き、1割以上の回答に「っ」表記がある。

以上の結果は、2.2.において、現代日本語では文末・文節末の「語末促音」を認識することができないと主張した通りの結果が出たといえる。認識できないにもかかわらず、(1)・(2)の前半部の末尾に比較的「っ」の表記が多く、同様に発音した(5)の前半部の末尾に「っ」の表記が少なかったのは、(1)・(2)の音声から「驚き」のニュアンスを連想した一方で、(5)の音声を聞いてはそうした連想をしなかったからであろう。回答者は「っ」の表記に際し、文末や文節末に現れる音ではなく、声音や文意などを根拠にしたと考えられる。さらに2.2.に挙げた金田（定延編2012:61）の説では、語末の「っ」表記は「直前の母音」を短く、鋭く切って発音することを意味するとしていたが、(3)の後半部では「わかりませんっ」という、「っ」の直前が撥音となる表記をする回答が1割程度あり、この点からも語末（文末・文節末）の「っ」表記は、発音と直接の関係がないことが分かる。

以上のことから、文末・文節末における小書きの「っ」は、表記の場合に、文章中の登場人物が「驚き」等の感情を抱いていることを示す標識であって、語に音声や意味を付加する役割を有してはいないことが明らかとなった。「驚き」等の感動の表出は、「あ／ああ」という感動詞の用法の一つと考えるべきであって、「あっ」という独立した感動詞があるわけではないということである。

力について、(1)の前半部は短呼形「え・えっ」の回答が82名（94.3%）、長呼形「えー」の回答が3名（3.4%）である一方、(2)の前半部は短呼形「あ・あっ」の回答が6名（6.9%）、長呼形「あー・あーっ」の回答が78名（89.7%）であるなど、どの間も短呼形・長呼形の一方に9割前後の回答が集中しており、語末（文末・文節末）の「伸ばす音」についての認識は、ほぼ一致しているといえる。

2.1.において、筆者は短呼形と長呼形を、同一の語の「発音の長さの違い」にすぎず、「軽い」「強い」といった感動の表出には直接に関係しないということを述べた。もし短呼形と長呼形がそれぞれ異なる感動を表出するのに用いられる別語であるという意識があるならば、語形を意識した共通の書き分けが観察されるはずである。しかし、長呼形に回答の偏った(2)を見ると、「あー・あーっ」の78名のうち、「あ」の後にかなの「あ・ア・ぁ・ァ」を表記したのは44名、長音符「ー」を表記したのは34名であった。また、(2)と同じく長呼形の「あー・あーっ」に回答が偏った(5)について、86名のうち「あ」の後にかなの「あ・ア・ぁ・ァ」を記したのは23名、長音符「ー」を記したのは63名であった。同じ音声を聞いて「あ」を連想するか、「ああ」を連想するかには個人差があるということであり、やはり短呼形と長呼形には明確な区別の意識はないことが分かる。

なお、2.1.で挙げた森山（1996）の分類においては、(1)・(2)・(4)が短呼形と長呼形のゆれが生じる「遭遇系」、(5)が長呼形のみ存在する「内発系」の情動的感動

詞であり、(5)は短呼形「*あ、つかれた。」となることがないはずである。それにもかかわらず、「ああ(一)」よりも「あー」の表記の方が多かったのは、「内発系」でも短呼形と長呼形の混乱が生じうること示している。反対に、(4)は「遭遇系」でありながら、「へー・へーっ」とした 85 名のうち、「へ」の後にかなの「え・エ・え・エ」を表記したのが 71 名、長音符「ー」を表記したのが 14 名という偏りがあり、小説等の会話文でも「*へ、なるほど。」が不自然であるが、これは短呼形自体が「へえ」という長音を含む形式であるためと考えられる。

本節では語末長音・語末促音語形に関する聞き取り調査を行った。いずれも結果は「『別語』としての聞き分けはできない」ということを示すものであり、第 2 節における筆者の主張を裏付けるものであった。

4. おわりに

本稿では、先行研究において別語とされてきた「あ」、「ああ」、「あっ」のような語末長音・語末促音語形について、以下の二点を明らかにすることができた。

キ。「語末長音」は、発音の長さから認定することはできず、また「感動の軽さ・強さ」を弁別する要素にはならない。すなわち、「あ」と「ああ」のような短呼形と長呼形は、別語として存在するわけではない。

ク。「語末促音」は、文末・文節末で聞き分けることはできず、意味を弁別する要素にならない。すなわち、「語末促音」と「驚き」に相関はなく、「驚き」を表すための「あっ」が、「あ／ああ」と別に存在するわけではない。

感動詞は「実際の発話の場面で声に出して発せられる」ことが前提とされているにもかかわらず、先行研究においては音声と表記の問題が混乱しており、発音の長さが異なるだけの短呼形・長呼形や、現代日本語では聞き分けられない語末促音語形が、それぞれ意味の異なる別語として扱われてきた。しかし、これらは独立して存在するものではない。小説等の会話文においては、短呼形と長呼形、ならびに語末促音語形が、「軽い」、「強い」、「驚き」のような機能を有することは確かである。しかし、これらは長音を表す符号やかな、小書きの「っ」が表記上の標識として機能しているのであり、実際の発音とは関係がない。

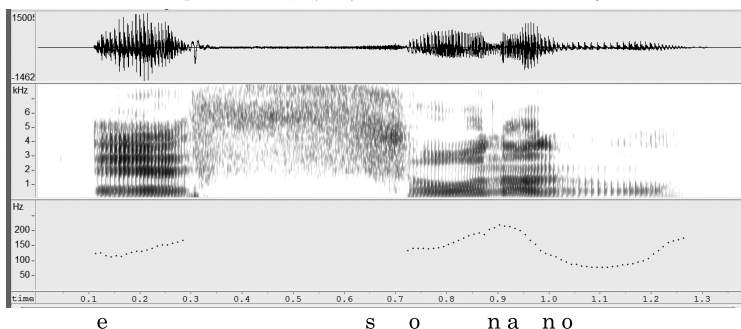
本稿の成果を踏まえ、今後は「文章における感動詞」独特の用法にも着目し、「実際の場面で用いられる感動詞」の用法との相違や、相互に与えた影響等について考察したいと考えている。

なお、本稿における主張の根拠とした 3.における調査は、アンケートの回答者の全員が 20 歳前後の女性であり、言語形成地等の確認もしていないため、一般的な日本人の聞こえの印象が反映されているとは限らないという問題がある。また、より客観的な検証を行うためには、筆者自身の声の録音でなく、第三者に音声の録音を依頼するのが適切であった。今後の研究における聞き取り調査の際には、上記の点を改善して実施したい。

(表 2 : 問(1)「え (っ, ー) そうなの (っ, ー)」の回答結果)

「え (っ, ー)」			「そうなの (っ, ー)」		
表記	人数	%	表記	人数	%
え	38	43.7	そうなの	80	92.0
えっ	44	50.6	そうなのっ	4	4.6
えー	3	3.4	そうなのー	1	1.1
その他	2	2.3	その他	2	2.3
計	87	100.0	計	87	100.0

※表 2～6 の「%」の列は小数第 1 位未満を四捨五入している。

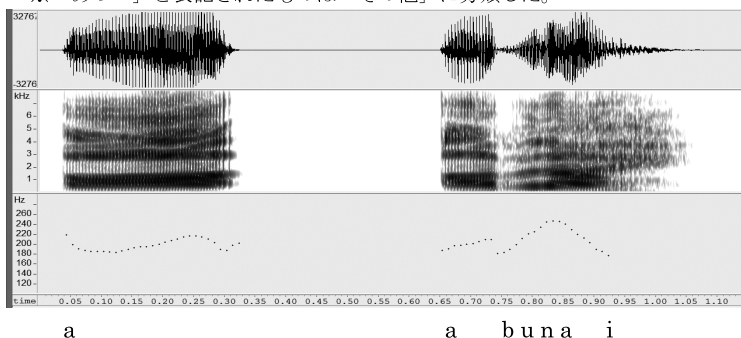


(図 1 : 問(1)「え (っ, ー) そうなの (っ, ー)」の音声)

(表 3 : 問(2)「あ (っ, ー, ーっ) あぶない (っ)」の回答結果)

「あ (っ, ー, ーっ)」			「あぶない (っ)」		
表記	人数	%	表記	人数	%
あ	4	4.6	あぶない	61	70.1
あっ	2	2.3	あぶないっ	23	26.4
あー	41	47.1			
あーっ	37	42.5			
その他	3	3.4	その他	3	3.4
計	87	100.0	計	87	100.0

※「あっー」と表記されたものは「その他」に分類した。

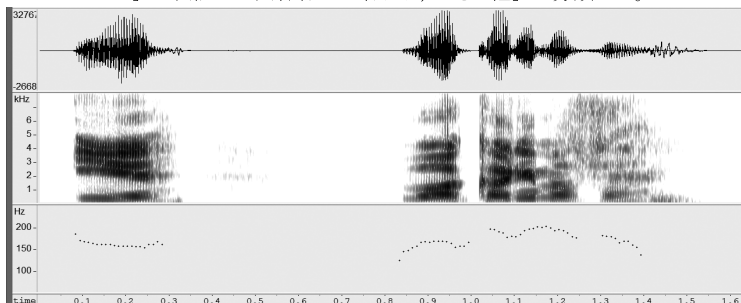


(図 2 : 問(2)「あ (っ, ー, ーっ) あぶない (っ)」の音声)

(表 4 : 問(3)「いえ (っ) わかりません (っ)」の回答結果)

「いえ (っ)」			「わかりません (っ)」		
表記	人数	%	表記	人数	%
いえ	57	65.5	わかりません	72	82.8
いえっ	22	25.3	わかりませんっ	9	10.3
その他	8	9.2	その他	6	6.9
計	87	100.0	計	87	100.0

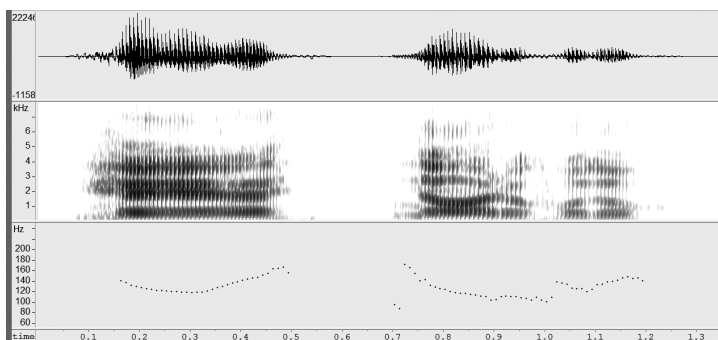
※「いいえ」と表記した回答者が 6 名おり、「その他」に分類した。



i e w a karimase n
(図 3 : 問(3)「いえ (っ) わかりません (っ)」の音声)

(表 5 : 問(4)「へ (一, 一っ) なるほど (っ, 一)」の回答結果)

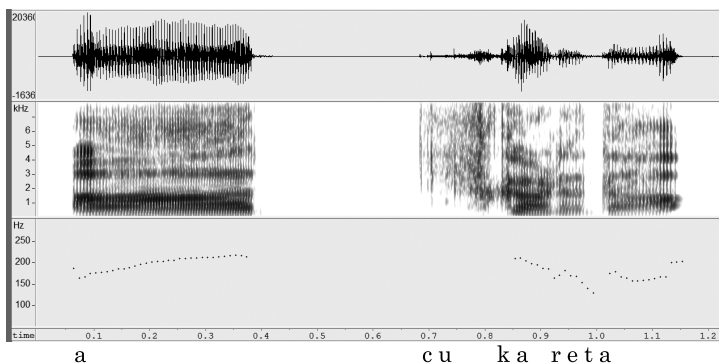
「へ (一, 一っ)」			「なるほど (っ, 一)」		
表記	人数	%	表記	人数	%
へー	80	92.0	なるほど	70	80.5
へーっ	5	5.7	なるほどっ	12	13.8
			なるほどー	2	2.3
			なるほどーっ	1	1.1
その他	2	2.3	その他	2	2.3
計	87	100.0	計	87	100.0



h e n a ru hodo
(図 4 : 問(4)「へ (一, 一っ) なるほど (っ, 一)」の音声)

(表 6：問(5)「あ (一, 一っ) つかれた (っ, 一, 一っ)」の回答結果)

「あ (一, 一っ)」			「つかれた (っ, 一, 一っ)」		
表記	人数	%	表記	人数	%
あ	1	1.1	つかれた	52	59.8
あー	62	71.3	つかれたっ	23	26.4
あ一っ	24	27.6	つかれたー	10	11.5
			つかれた一っ	1	1.1
			その他	1	1.1
計	87	100.0	計	87	100.0



(図 5：問(5)「あ (一, 一っ) つかれた (っ, 一, 一っ)」の音声)

参考文献

- 石川創 (印刷中) 「感動詞の認識に関する音声上の問題について」『駒沢女子大学研究紀要』21, 駒沢女子大学
- 大槻文彦 (1889) 「語法指南」『言海』第一冊, 大槻文彦
- 定延利之編, 定延利之・森篤嗣・茂木俊伸・金田純平 (2012) 『私たちの日本語』朝倉書店
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』, くろしお出版
- 富樫純一 (2013) 「感動詞・応答詞の分析手法」『日本語学』32-5, 明治書院
- 橋本進吉 (1929) 「日本文法論」『橋本進吉博士著作集第七冊 國文法體系論 (講義集二)』, 岩波書店 1959
- 福盛貴弘 (2010) 『基礎からの日本語音声学』東京堂出版
- 古川正雄 (1873) 『繪入智慧の環 初編下 詞の巻』古川正雄
- 森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」『語文』65, 大阪大学国語国文学会
- 国語辞書については, 本文中で書誌情報を示した。ただし戦後の小型国語辞書の編者については, 筆頭の編者のみを示した。